人間科学研究所通信

Newsletter of the Institute of Human Sciences
Musashino University

第10号

目次
Contents

特集：社会福祉学科・人間科学研究所シンポジウム
『ソーシャルワーク実習において、メゾ・マクロレベルでの実習をどのようにプログラムするか』

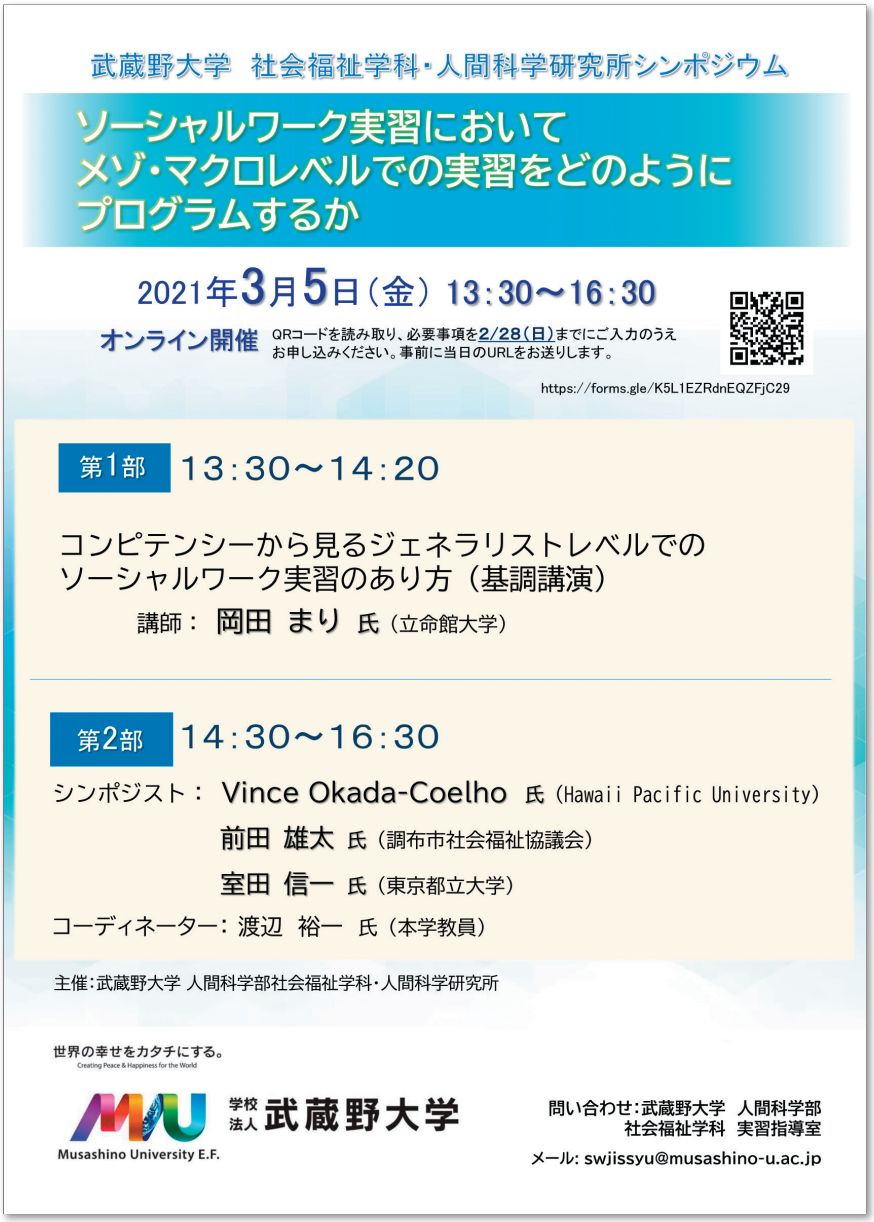
第1部
基調講演
コンピテンシーから見るジェネラリストレベルでのソーシャルワーク実習のあり方 ── 2
岡田　まり 氏

第2部
アメリカの教育機関での実習教育について ── 3
Vince Okada-Coelho 氏

社会福祉養成校の実習担当教員の立場から ── 3
室田　信一 氏

実習指導者の立場から ── 3
前田　雄太 氏

2021 年 3 月 5 日社会福祉学科・人間科学研究所シンポジウムが、オンラインにて開催されました。「メゾ・マクロレベルの実習を、どのようにソーシャルワーク実習のプログラムとして設定するか」というテーマについて、日本および海外の教育機関等で実習指導をされている方々のご講演をいただくことができました。講演後の意見交換を通して、このテーマについてより深い議論がなされ、有意義なシンポジウムとなりました。



世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World

Musashino University
武蔵野大学

第 1 部
コンピテンシーから見るジェネラリストレベルでのソーシャルワーク実習のあり方

基調講演：岡田 まり　立命館大学産業社会学部現代社会学科 教授

コンピテンシーは、職務や特定の状況において効果的あるいは優れたパフォーマンスにつながるような個人の特性のことで、高い成果を上げている人たちのヒアリングや観察をして、どんな行動特性があるのかを調べるものである。現在、教育ではコンピテンシーの習得を目標とするカリキュラムが作られるようになっている。

アメリカでは、学部教育と大学院修士課程のソーシャルワーク教育のプログラムを認証している団体が 9 つのコンピテンシーを設定している。その 1 番目が、倫理的かつ専門職としての行動が取れること。ソーシャルワーカーが目指していることは何か、歴史、役割を分かって、専門職として望ましい行動が取れることである。2 番目が実践で多様性と相違に対応すること。多様性の尊重も大切ですが、多様性の中の相違から差別・偏見が起こることもある。それらがどのように起きているかメカニズムを理解して、是正することがソーシャルワーカーに求められる。3 番目が人権と社会的、経済的、環境的な正義を推進すること。ソーシャルワーカーが一番拠り所にするのは人権と社会正義。社会的、経済的、環境的な正義ではない状況がどう起こって維持されているか、改善にはどういう方法があるか学び、実際にどう動けば良いかが分かることが重要。4 番目が実践に基づく調査を行い、調査に基づく実践を行うこと。根拠や調査結果に基づいて介入し、その実践のプロセスと結果を評価すること、そして、実践に役立つような調査をすることである。5 番目が政策、実践に関与すること。政策に基づいて法律や制度があるが、ある福祉制度のもとでサービスを提供することは、その福祉政策の実現に関わっていることである。政策を実現するだけでなく、政策を作るプロセスにもソーシャルワーカーは関与する。たとえば、都道府県や市町村での社会福祉審議会はその自治体の政策づくりに関与している。政策が良くない場合は、改正するためのアクションを起こすことも政策実践で、アドボカシーもここに関わる。実習でも法律や制度政策については調べるが、政策の実現のために自分たちが動いているとか、自分たちもその政策に影響を及ぼすことができるということまで思い至らないことが多い。新しい資源を開発するのはここに関わることである。

6 番目からは実際のソーシャルワークの実践のプロセスで、まず個人、家族、グループ、組織、コミュニティと関わるエンゲージメント。何らかの課題に直面している個人、家族、グループ、組織、コミュニティと関係づくりをし、一緒に取り組む合意を形成することをエンゲージメントと言う。7 番目は、個人、家族、グループ、組織、コミュニティのアセスメント。個人のアセスメントでも必ずその家族や住んでいる地域、関係している組織、子どもがいれば学校、仕事をしていれば職場、その他コミュニティなどを包括的にアセスメントする。8 番目に個人、家族、グループ、組織、コミュニティへの介入。この介入についてもいろんな方法がある。実際に行動レベルで実施する部分である。9 番目は個人、家族、グループ、組織、コミュニティへの実践の評価。取り組みのプロセスが適切か、成果が出ているか評価し、評価に基づいてより質の高い実践をめざす。

次にジェネラリストについて説明する。ジェネラリストの反対にスペシャリストがあるが、社会福祉士はジェネラリストである。ジェネラリストソーシャルワークについては、12 項目で説明されている。一つ目に、折衷的な知識基盤をもっている。1 つの理論的なバックグラウンドのみではなく、システム理論も、エコロジカルな見方も、バイオサイコソーシャルモデルなどいろんなものを合わせて使う。2 番目に、専門職としての価値・倫理に応じて対応する。3 番目が、幅広い実践スキルを用いる。個人に対応するコミュニケーションスキル、家族やコミュニティと活動するときのスキルなどを状況に応じて使い分ける。4 番目が、個人、家族、小集団、組織、コミュニティなど、いろいろなサイズのシステムに対応する。5 番目が、クライエントのエンパワメント、ストレングス、レジリエンスを重視する。6 番目が、人間の尊厳を重視する。7 番目が、人権擁護。社会的正義、経済的、環境的な正義を重視する。8 番目に、組織の枠組みの中で働く。9 番目に、幅広い専門職の役割を担う。カウンセラー、ケアマネジャー、アドボケーター、仲介役にもなる。リサーチに基づいて実践を行い、科学的な方法を用いる。12 番目に、計画的に変化が起こるようにする。

これらを身に付けた上で、さらに特定の領域のトレーニングを積んで高度なレベルになるのがスペシャリスト。学部レベルは、全てジェネラリスト養成をめざしている。

次に、ミクロとメゾとマクロレベルについてである。ミクロは個人や家族で、マクロは政策とか大きな地域ということには、おおよそ合意は取れているが、メゾレベルが何なのか、意外とばらつきがある。分け方は諸説あるが、ヘップワースによれば、ミクロレベルは、困難な状況に直面している個人や家族の方への直接援助。メゾレベルは、家族ほど親密ではないグループや、学校、職場、近隣、仲間など、有意義な対人関係があり、クライエントに直接影響するシステムの変容を目指す介入。たとえば、職場に合理的配慮を求めて相談に行くなど、本人に対してではなく、本人に影響を及ぼす周辺に理解・協力を求めるもの。また、ソーシャルワーカーが所属している機関や施設もクライエントへのサービスのための会議、記録、職員のシフト決め、研修、教育、実習生指導、組織内・組織間の連携で外部会議への参加、養成校教員の学生指導、スーパービジョン、コンサルテーション、これらも全部メゾレベル。「メゾレベル、やっていない」と言われることがあるが、組織に所属してメゾレベルの仕事をしていない人はいない。メゾレベルはクライエントの顔が分かるが、マクロレベルは、人の顔が見えない（対面でのサービス提供を行わない）もの。マクロは社会問題に対応するために、社会の中で必要な組織化や社会計画を立てるもの。利用者が使っているサービス利用の制度を学ぶのもマクロレベル。

ソーシャルワーク実習で、コンピテンシーを獲得するためには、人と関わること、一緒に活動することが重要。倫理綱領を実習前に読んで、実習でソーシャルワーク専門職として倫理的にすべきこと、してはいけないことを場に即して考え、実践して振り返る。目の前の人の最善の利益のために、また、自己決定を尊重していることを伝えるために、どんな態度や物の言い方、動き方が重要か意識してほしい。実際にやってみてうまくいったか、尊重していると伝わったかを振り返る。そこが専門職としての基本ライン。

エンゲージメントで重要なのは、関係づくり。誰かと関わるとき、相手の立場に立つとどう感じるか想像することが大事。アセスメントは、情報を収集して整理し、理解を深める。ミクロレベル中心の実習施設でも、必ず利用者本人と家族との関係や、その家族の文化的、歴史的、自然環境を含めてどういった地域にお住まいかということ、どんな制度を利用しているか、必ずミクロからマクロまでセットで考えるように習慣づける。今は個人からスタートしたが、地域担当から具体的にその地域の中で地区ごとの違いがあること、そこにお住まいの方々がどんな生活をしているか考えることもある。個人から始まっても、地域から始まっても、ミクロ・メゾ・マクロすべてを網羅して見ることが重要。

それから、アセスメントでは、同じ地域でも人によってどのような違いがあるか、同じような年代、同じ性別でも、そこには多様性がある。それについて自分がどう考え、感じているかを振り返る。自分の中に偏見があるとか、ある種の抵抗を感じるという自己覚知がここでは重要。

福祉政策、法律、制度については、実習前に学習する。そして実習中は、その法律・制度が福祉の現場でどうなっていて、サービスを利用するプロセスで何が起こっているか、何が不足しているか、深く見ることが必要。そのためには自分で人に話を聞きに行くことも重要。何を知る必要があるのか、その情報はどこから、どう集めてこられるかを意識的に聞くと、実習生はそれを考える。

介入は、課題の改善、解決、予防を目指して計画を立て、実施する。まず計画を立てるときに、サービスオリエンテッドではなくて、クライエントオリエンテッドの計画が立てられようにしたい。サービスオリエンテッドとは、法律や制度に基づいて事業を展開しているので、その制度で使えるサービスだけで計画を立てるもの。しかし、支援の枠からこぼれ落ちる人がおり、自分が提供できるサービスだけの計画では不十分。だから、クライエントオリエンテッドで、クライエントのニーズに基づいて計画を立てる。目の前の利用者にとって、本当に必要なことは何かを考えて、長期的にはこうだけど、この長期目標に到達するのはうちの施設だけではできない、じゃあ誰と手を組んでどの施設と連携すればよいかを含む総合的な計画を立てる。実習生にとっては、自分の実習先以外の広い範囲で、目の前の利用者が幸せになるにはどうしたらいいか、あそことここが手を組んでこういうことをやるために、中期的にはこういう順番でやる、そして今、自分ができることは何かを考え、みんなで話し合いをするとか、話し合いで自分がファシリテーターや司会の役割をするためにはどうしたらいいか、どう話を持っていけばいいかを自分の中で考える。アドボケイトが必要な利用者を担当して、権利侵害をしている人に対してアドボケーションするとき、どう話を進めて、どんな話をするかを模擬的にすることも有効。

それから最後に評価。実際に今のように何らかの計画を立てて取り組んだときは、必ず振り返る。そして、「良かった」「ここは改善したほうがいい」など考えて、その改善方法として具体的に何をどうすればいいかを考え、アクションプランを立てる。継続的に自分の関わり方、スキルを改善する時間が持てればありがたい。誰でも自分で気付かないところがあり、振り返りでフィードバックをいただき、一緒に考え、常に周りの方々にオープンでいることが実習生にとって重要である。

第 2 部

アメリカの教育機関での実習教育について　Vince Okada-Coelho

Hawaii Pacific University　College of Health and Society-School of Social Work　Assistant Professor

アメリカの大学のソーシャルワーク学士の実習は、3 年生の時は 1 学期で 100 時間、4 年生の時は 2 学期にかけて 450 時間、最大で 3 カ所で実習可能。アメリカは州によって違い、ハワイ州ではソーシャルワークのライセンスを取る場合、修士の学位が必要で、ほとんどのソーシャルワーカーは修士を持っている。修士では、4 学期間合計で 900 時間の実習。多い場合 4 カ所での実習が必要。実習というのは、学生にとっては不安に思うことが多く、大学側、実習先、実習指導者と一緒になってそういう環境づくりというのを作るのも大切。

メゾ・マクロレベルでの実習の例で、ある学生が 3 学期目の実習で性的虐待、DV の被害者のサポートをしている非営利団体でミクロレベルの実習をして、4 学期目は同じ団体でマクロレベルを中心に実習した。この団体は、無農薬農園やレストランを持っていて、社会復帰を支援する活動を行っている。4 学期目には実際に参加者と農園作業に入ることで、プログラムの理解度を高める。この地域と団体はハワイの先住民族との関わりも多く、アメリカ本土出身のこの学生は、コミュニティのアウトサイダーとして入り込む意識や地域の慣習にのっとってコミュニティに入るスキル、自身をどう紹介してコミュニティの信頼を得るかという課題があった例。エンパワメントの活動として学会発表したり、アウトリーチ活動をしたりした。他には、団体内でのトレーニングカリキュラム、データ等のエビデンスをまとめてポリシーペーパーを書き、議会での証言や地元議員に理解を求める活動をした。まとめの発表では、社会企業という観点でプログラムに関わり、マクロを行いつつもクライアントのそれぞれのニーズに基づいて持続する形で社会復帰できるようなミクロの活動もできており、違うレベルとの相互作用という理解も高まった。

他の例ですが、1 月の 3 週目は議会が一般公開される。これから決断が控えている法案に対して、学生たちに課題でポリシーペーパーを用意させ、議員に会いに行く活動をした。学生がブースを出して情報提供することもした。

ミクロ・メゾ・マクロの実践を理解する例え話がある。あるカップルが川の下流のところで釣りをしていると、川の上流のほうから溺れた人が流れてきた。苦しんでいる方を放っておけず助け出して、手当をして救急車を呼んで病院に送り、家族等との連絡も取る。しかし、溺れてくる方たちがどんどん上流から流れてくる。カップルは疲れ果ててしまう。カップルが、何が原因でこんなに溺れる人がいるのかと上流を見に行くと、そこは見晴らしのいい展望台で、看板も柵もない滑りやすい崖。だから人が川に落ちて溺れたと気付く。カップルはそのコミュニティのリーダーを探し、事情を説明して、データや証拠を伝え、そして、注意を促す看板や柵を設置するよう願いする。下流には見張りやライフガードを配置するようにお願いした。

この例え話は、ソーシャルワークを説明している。下流で溺れてくる方々のレスキュー、状況確認、病院に送るなどの活動、家族、ご友人などとつなげる作業もする、上流に行って根本的な原因が見つかれば、解決のための提案をしたり、リーダーたちと交渉したりする。または、他の業種の方たちと手を組んで解決策を探ることもする。実習においても、どの現場においても、例えばミクロにフォーカスして実習しているときでも、メゾ・マクロの面から介入できるように、また協働できるような目を持つことが大切にできる。

「社会福祉士養成校の実習担当教員の立場から」室田 信一

東京都立大学人文社会学部人間社会学科 准教授

メゾ・マクロレベルの実習では、4 つのスキルセットの習得を期待したい。1 つは、エージェンシーの開発。エージェンシーとは、ワーカー自身の主体性。自分自身がなぜこの問題に取り組むか、自分の価値観はどこから来るか、これを利用者や参加者に伝えるスキルや能力。

2 点目が、他者のリーダーシップの開発。他者のリーダーシップの開発を促して、他者が一歩踏み出して自分たちが直面する課題に働き掛けられるように支援する。

3 番目にパワー分析。コミュニティがどういう変化を起こせるか、どういう権力構造か、誰に働き掛けることでその変化を起こせるか分析する。自治会では自治会長に働き掛けるのが大事なのか、住民に大きな影響力を持つ人には誰がアプローチすることが有効かもパワー分析。

4 番目に、戦略を練る。どうアプローチをすると具体的に変化を起こせるか、デモで圧力を掛けて政策を通すか、委員会を組織化するか、など。

アメリカと日本の実習を同等に考えることは難しい。エッセンスを議論したい。自分の 1 年目の実習は住宅開発系の NPO の中間支援組織。1 年携わったプロジェクトは、100 以上の会員団体のコミュニティ・オーガナイザーの組織化。キーパーソンとなるオーガナイザーの組織を最初に訪問し、1 対 1 の話し合いを繰り返して関係を作る。面接した人たちに呼びかけ、リーダーシップ・チームを作り、会議をして、非営利の住宅開発で何が課題か、どういうアクションが必要か、どういう変化を起こす必要があるか議論する。取り組むキャンペーンを決めて、作戦会議をして、1 回目のキックオフ会議を開催、その場の関係者、当事者、キャンペーンに参加してほしい人たちに集まってもらいキャンペーンを立ち上げ、最終的なゴール設定をして進めていく。ポリシーペーパーを作って議会に提出するなど、マクロレベルでも中間支援として市全域に働き掛けた。

2 年目は市内のセツルメント。草の根の外国人住民、移民の組織化。それまでこの団体がやりたいけれども手が回らないことで、それをしたいとお願いして実習を受け入れてもらい、移民コミュニティの組織化プロジェクトを立ち上げた。その外国人向けの無料の英語クラスを訪問して外国人の権利の問題、直面している課題に取り組みたい人やリーダーをリクルート、そのリーダーたちに集まってもらいリーダーシップ・チーム会議を開催、取り組むべきキャンペーンの作戦会議で課題を設定、何に取り組むか考えた。地元の議員事務所を訪問し、その地域の課題を議員に伝えた。外国人や移民には地域活動に取り組んだ経験がない人も多く、リーダーシップを養成する研修を開催した。

日本の実習では、全体を体験する部分が大きく、コミュニティの組織化プロジェクトを任されることも、ほぼない。

メゾ・マクロレベルの実習は長期分散、プロジェクトベースの実習がいい。若者の組織化は、学生だからこそ力を発揮できる。それを通してなぜ自分が若者の組織化をするか、自分自身と向き合って自分自身のエージェンシーを獲得する手続きになる。さらに周りの若者や学生のリーダーシップを開発する経験になる。

現場にとってプラスになるが、マイナスにはならない。丁寧な組織化と手探りの組織化があり、日本は計画して失敗のない丁寧な組織化。アメリカの経験は手探りの組織化。うまくいかなければやめる。実習生に任せて、うまくいかなければ止まる、うまくいけばプロジェクト化して進む。こういう手探りの組織化がもう少し許容されれば、日本の実習でマクロの実習が生み出せると思う。

実習指導者の立場から　前田 雄太

社会福祉法人調布市社会福祉協議会

地域をフィールド、クライアント、地域、関係機関、その背景の社会とか、メゾやマクロレベルの部分も入れてソーシャルワーカーとしての価値、知識、技術などの理解を深めることを、目指すべき実習のあり方として職員間で共有した。

調布社協の事業・機能がどのレベルか分析した。ミクロレベルでは相談支援、各種サービス等、メゾ・マクロレベルでも多様なプログラム、機能があると可視化できた。

加えて、実習指導の視点を共有した。事業に住民や当事者がどのように参加し、施設に地域住民がどう関わって、どのような視点で施設を見ていて、事業に当事者が参加するとどのような波及効果が生まれるか実習の説明やプログラムに入れること、組織化や分野を問わない団体機関とのネットワーク、個別支援と地域支援の一体的推進、利用者を住民という視点で見るとその人がどのような地域生活を送っていて施設は何ができるかを考えること、フォーマルとインフォーマルを組み合わせた支援、インフォーマルの部分をどう開発するか、探していけるのか、という実習指導の視点。

以前は学生にひたすら各事業の説明を座学で伝えるプログラムだった。今年度は最初に車で市内を回った。学生は事前に人口、機関などを調べてくるが、なかなか実際の経験になっていない。市内を回ると、地域ごとの歴史、文化、様相を体験する。それを踏まえ、法人全体の話をしながら各事業に参加をしていく形。地域福祉コーディネーター、生活支援コーディネーター、地域支え合い推進員等、地域を基盤に活動しているプログラムも入れ、各事業でミクロの視点を持ちつつ、メゾ・マクロレベルの視点に戻し、地域の中で捉えることを考えるプログラムに変えた。

地域アセスメントシートの作成は、地域をどう捉えるかという点で学生が取り組む。自分でホームページなどを調べる。自分で地域に行って実際はどうか見てもらう。自分で調べるのが大事。どう情報を収集するか。地域に出ると、書面やホームページでは見えない部分が見える。スーパーが坂の上にあれば、坂の下の高齢者は行けるのかという視点になる。現場を見ると立体的に見えてくる。施設の地域での位置付けも可視化される。

次に、住民や地域との関わりに着目して、法人や施設の役割を知る。例えば、施設ができたときは周辺住民からの猛反対があった。今は地域の中の施設として認識されている。その過程で何をしたか考えると、施設だけでなく周辺の住民との関わり、住民へのアプローチを考えられる。

次に成り立ちや形態が異なる複数の住民活動と関わること。サロン活動、常設の居場所を複数見る形にすると、成り立ち、形態、地域活動も違うことが分かる。関わる人や専門機関、参加者の感覚、意識、機能も違い、比較すると理解が深まる。

次に、地域に特化した長期分散型実習は、効果的と感じた。

これらは社協だけではなく、どの施設でもできる。こういうことからやってみてはどうかということを 4 点にまとめた。1 点目が、自分の組織が何をしているか分析し、ミクロ・メゾ・マクロレベルを言語化する、2 点目は、それを法人内で共有し、実習指導者だけでなく、他の職員も認識して実習を提供できるようにする、3 点目は、地域アセスメントをし、施設を取り巻く地域の状況を実習に入れる、4 点目が、関わっている住民などメゾレベルの部分をプログラムに入れる。住民と話す場面、ボランティアと話す場面など。施設・法人が地域でどのような位置付けでメゾ・マクロレベルに取り組んでいるかから、メゾ・マクロレベルの実習プログラムを入れていける。

2020（令和２）年度人間科学研究所構成員一覧

	氏　名	所属等
所　長	小西　聖子	本学人間科学部長兼人間社会研究科長
運営委員	辻　恵介	本学人間科学部教授
	渡辺　裕一	本学人間科学部教授
	熊田　博喜	本学人間科学部教授
	大山　みち子	本学人間科学部教授
	小西　啓史	本学人間科学部教授
	小嶋　智幸	本学人間科学部教授
	渡邉　浩文	本学人間科学部教授
研究員	岩本　操	本学人間科学部教授
	大崎　広行	本学人間科学部教授
	小俣　智子	本学人間科学部教授
	熊田　博喜	本学人間科学部教授
	五島　直樹	本学人間科学部教授
	中島　聡美	本学人間科学部教授
	西本　照真	本学人間科学部教授
	野口　友妃子	本学人間科学部教授
	稗田　里香	本学人間科学部教授
	藤森　和美	本学人間科学部教授
	北條　英勝	本学人間科学部教授
	泉　明宏	本学人間科学部准教授
	北　義子	本学人間科学部准教授
	木下　大生	本学人間科学部准教授
	小高　真美	本学人間科学部准教授
	城月　健太郎	本学人間科学部准教授
	日野　慧運	本学人間科学部准教授
	矢澤　美香子	本学人間科学部准教授
	永野　咲	本学人間科学部講師
	淺野　敬子	本学人間科学部助教
	今野　理恵子	本学人間科学部助教
	坂入　竜治	本学人間科学部助教
	櫻井　真一	本学人間科学部助教
	嶋田　真理子	本学人間科学部助教
	畠山　恵	本学人間科学部助教
	岡　寿子	本学介護福祉別科教員
	小野内　智子	本学介護福祉別科教員
	松本　真一	本学介護福祉別科教員
客員研究員	橋本　修左	本学名誉教授
	北岡　和彦	本学名誉教授
	野村　信夫	本学客員教授
	狐塚　順子	本学客員教授
	堀越　勝	本学客員教授、国立精神・神経医療研究ｾﾝﾀｰ：認知行動療法ｾﾝﾀｰ長
	磯貝　隆夫	本学客員教授、福島県立医科大学　ふくしま国際医療科学センター教授
	小原　収	本学客員教授、かずさ DNA 研究所臨床オミックス解析グループグループ長
	菅野　純夫	本学客員教授、東京大学名誉教授、東京医科歯科大学・難治疾患研究所・非常勤講師
	夏目　徹	本学客員教授、産業技術総合研究所生命工学領域
	新家　一男	本学客員教授、産業技術総合研究所・創薬基盤研究部門・グループ長
	宮崎　純一	本学客員教授、大阪大学産学連携本部　特任教授
	山崎　美貴子	本学客員教授、神奈川県立保健福祉大学前学長
	山本　雅	本学客員教授、沖縄科学技術大学院大学　細胞シグナルユニット教授
	家村　俊一郎	本学客員教授、福島県立医科大学　ふくしま国際医療科学センター教授
	市山　浩二	本学客員准教授、インテグリカルチャー株式会社　研究開発グループ
	河村　義史	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアム JBIC 研究所特別研究員
	若松　愛	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアム JBIC 研究所特別研究員
	立川　公子	本学人間科学部人間科学科非常勤講師

武蔵野大学人間科学研究所通信 | 第 10 号 |
Newsletter of the Institute of Human Sciences Musashino University

企画編集・発行 / 武蔵野大学人間科学研究所　発行日 / 令和３年3月31日

世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World

Musashino University
武蔵野大学

www.musashino-u.ac.jp
武蔵野大学 人間科学研究所
〒135-8181 東京都江東区有明 3-3-3
Tel.03-5530-7448